
金戒光明寺蔵地獄極楽図屏風
—その基礎的問題について—

浄土宗大本山・金戒光明寺所蔵の地獄極楽図屏風二曲一双（以下本図）は、山越阿弥陀図屏風（以下山越阿弥陀図）と共に伝来した、鎌倉後期の注目すべき仏教絵画である。人物や建築、景物などは鮮やかで丁寧な彩色、鋒先を多用した筆遣いにより細密に描写され、情景はストーリー性が感じられる。二曲屏風の形式であるが、構図は明らかに両隻の連続性と対称性を確保するもので、上部に浄土、中央に大海を配し、右隻下部には現世、左隻下部には地獄の景を表す。海を挟んだ浄土と穢土の対比など、明快な構成でありながら、本図の主題やメッセージは未だ明らかではなく、諸行をよしとする立場なのか専修念仏のみを勧める立場なのか、議論が分かれるところでもある。主題を考える上で重要な現世・地獄場面の人物図様のいくつかは、説話との関連が既に指摘されているが、全ての図様の典拠が読み解かれた訳ではなく、またその様式や制作期、そして山越阿弥陀図との一具性など不明な点も多く、考察の余地が残されている。本発表では、本図に関するこれらの基礎的な諸問題について論じたい。

まず主題の問題について、人物の装束などに着目してそれぞれに該当する説話を探すと、唐代『往生西方浄土瑞応刪伝』や平安時代『拾遺往生伝』などの様々な往生伝集に収録された和漢の往生伝を当てはめることが可能であった。それらは口唱念仏往生を始め、口唱双卷経往生、聞弥陀名号往生、観想念仏往生、勸進念仏往生、理観往生、讃歎浄土往生などの往生伝であり、このことから本図には諸行往生伝が描かれていることが判明した。

なお、これら本図に描かれた諸行往生伝のうち数話は、『三部経大意』『逆修説法』など、法然の言説に引用されてもいる。すなわち、「専修念仏」観が未完成で、かつ天台色が強く残っていた段階の、十二世紀後半の法然の思想とリンクしているのである。本図の伝来した金戒光明寺が開基・法然以来、代々の住持が円頓戒を相承するという立場に立ち、天台と親密な関係をもっていたという寺院の性格にも適う。

様式については、正嘉元年（一二五七）の年記を持つメトロポリタン美術館所蔵の観音経絵巻などの經典絵巻、諸紺紙金泥経見返絵と筆法や図様の類似が認められ、それらの制作に携わった経絵師の手になるものと想定しておきたい。

本図と山越阿弥陀図とが同寸であることは両者が一具として企図された可能性を示す。さらに本図の浄土景を見るに虚空の白帯や宝蓋が当麻曼荼羅に図様を依拠しているにも関わらず、阿弥陀仏の結ぶ印相は当麻曼荼羅に特徴的な転法輪印ではなく、山越阿弥陀図と同じ上品中生印である。山越阿弥陀図の制作年代も十三世紀後半と推定されることを考えれば、両者は一具として同時期に制作されたと考えるべきだろう。以上、主題と様式、山越阿弥陀図との関連などの基本的な問題に改めて取り組むことで、本図の美術史的位置を確認したいと考える。